

第5回 孤独・孤立に関するフォーラム（神戸市）

テーマ「人・地域をつなぐために」 議事録

（開催要領）

1. 開催日時：令和3年8月19日（木）13:30～15:04
2. 場 所：神戸市役所1号館14階大会議室
3. 出席者：

坂本 哲志	孤独・孤立対策担当大臣 ※
久元 喜造	神戸市長
岸田 耕二	社会福祉法人すいせい理事長
実吉 威	公益財団法人ひょうごコミュニティ財団代表理事
長谷部 治	社会福祉法人神戸市兵庫区社会福祉協議会地域支援課長
福永 君江	月が丘ふれあいのまちづくり協議会委員長
松岡 喜久子	NPO法人インクルひろば代表理事

※オンラインによる参加

（議事次第）

1. 開会
2. 参加者からのヒアリング
3. 意見交換
4. 閉会

（配布資料）

参加者プロフィール
メッセージ集
久元神戸市長資料
岸田氏資料
実吉氏資料
長谷部氏資料
福永氏資料
松岡氏資料

○谷内孤独・孤立対策担当室長 それでは、ただいまから第5回「孤独・孤立に関するフォーラム」を開催いたしたいと思います。

本日は、お忙しい中、また雨の中、お足元が悪い中でお集まりいただきましてありがとうございます。

本日の司会を務めさせていただきます、内閣官房孤独・孤立対策担当室の室長の谷内でございます。よろしくお願いいたします。

この孤独・孤立に関するフォーラムでございますけれども、実際に支援活動に取り組まれている方々などから直接現場の声をお聞きいたしまして、今後の政策立案に生かしているということを目指して開催しているものでございます。

これまで子育て、生活困窮、子供・若者、女性というテーマで、東京におきまして4回開催いたしました。毎回テーマを変えながら、秋にかけて10回程度開催することといたしております。今回は、初の東京以外での地方開催となります。

なお、昨今の感染状況を踏まえまして、坂本孤独・孤立対策担当大臣は東京にてオンラインでの参加となります。

第5回の本日でございますけれども「人・地域をつなぐために」をテーマといたしまして、神戸市及び神戸市内の各種団体による取組状況や今後に向けた課題につきまして、意見交換を行います。参加者の皆様から事前にいただいているメッセージにつきましては、1枚にまとめさせていただきます、このように机上に配付させていただいております。

本日も、全てメディアにオープンな形となっております。フォーラムの様につきましては、メディアの方々に別室で傍聴いただけるようにしてございまして、後ほど動画で公開させていただく予定でございますので、御承知おきください。

それでは、初めに、坂本孤独・孤立対策担当大臣より御挨拶申し上げます。

それでは、大臣、よろしくお願いいたします。

○坂本孤独・孤立対策担当大臣 皆さん、こんにちは。孤独・孤立対策担当大臣を仰せつかっております、坂本哲志でございます。本日は、お忙しいところお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

今、司会が言いましたように、今回は第5回目のフォーラムとなります。本来であれば、私が神戸に赴きまして、皆様と直接お会いして意見交換をしたいところでした。しかし、新型コロナの感染拡大によりまして、私は東京でオンラインという形で皆様とお話をするという形になりました。御容赦いただきたいと思います。

本日は、初めての地方開催ということで、まさに地域に密着した、住民と近い立場で孤独・孤立対策に取り組まれている団体から意見をお伺いいたします。

NPO、社会福祉協議会、更には社会福祉法人など、孤独・孤立対策に取り組む団体は、全国的なものもあるでしょうが、比較的小規模で地域に密着して取り組まれているものも多いのではないのでしょうか。こうした地域に密着した団体の活動をお聞きし、施策にどのよ

うに反映していくか、お集まりいただいた現場の方々から貴重な御意見をお聞きしたいと考えております。大変期待しているところでございます。

本日は、どうかよろしく願い申し上げます。ありがとうございます。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 続きまして、久元神戸市長より御挨拶と神戸市の取組についての御発言をいただきます。

久元市長、お願いいたします。

○久元神戸市長 神戸市長の久元喜造でございます。

坂本大臣、今日は本当にありがとうございます。地方で初めてのこのフォーラムを神戸で開催していただきましたことを大変光栄に思っておりますし、感謝申し上げます。

今日は、実際に活動されている皆様方のお声を聴くというのが目的だと思いますので、私からは簡単に神戸市の孤独・孤立問題への取組の考え方につきまして御説明申し上げます。

大都市というのは、その成り立ちのときから孤独・孤立を抱えている場所だという気がいたします。神戸市は、1868年に開港してから大都市として成長したわけですがけれども、そこに集まってきた人々というのは、農山村社会のしがらみから逃れるために、匿名性の中に埋没するという目的を持ってきた人もたくさんいるわけです。

しかし、人間は一人では生きられませんから、必ず問題が生じる。大都市の中の貧困の問題、孤独・孤立の問題が当初から起きてきている。それに対して、様々な慈善団体、福祉団体が活動をスタートいたしました。特に、明治の終わり、大正から活動を開始し、その源流を持ちながら今も活動している団体は、神戸にもたくさんあります。

そういう歴史の上に、近年起きている孤独・孤立の問題は、また違う要素が重なっている。それは、よく言われていることですがけれども、家庭のありようが変わってきた。大家族から核家族になり、そして、今は単身世帯、父子世帯、母子世帯が増えている。このような方々がむしろ多数派になりつつあるというのが今の状況です。

もう一つは、ネット社会です。周りのリアルな隣近所でのつながりはほとんどないけれども、いつもネットにつながっていて、見知らぬ他者とは常にコミュニケーションがあるけれども、地域社会の中でのつながりがほとんどない人たちが増えている。こういうリアルな社会が縮退し、バーチャルな世界が拡張しているというのが現実。その中から孤独・孤立の問題もまた違う様相を見せながら広がっているというのが今の状況ではないかと思えます。

行政として、これにどう立ち向かうのかというのは大変難しい問題ですがけれども、神戸市は、孤独・孤立に関する問題を幾つかの局面とか場面に分けて取り組んできました。

それが4ページですがけれども、一つは、ひきこもりの支援です。これは典型的に独りで引き籠もっているわけですから、孤独・孤立の状況です。これもそれぞれの部局で対応しようと思っても、孤独・孤立の問題ということ、あるいはひきこもりの問題になった途端にそれ以上話が進まない。これを各部局が連携して対応できるように、一元的な相談窓口

をつくった。これがひきこもり支援担当室です。

もう一つは、ヤングケアラーと言われている問題。神戸では、こども・若者ケアラーと呼んでいますが、これも一元的に対応する窓口をつくりました。

子供の居場所づくり、あるいはシニア世代の集いの場、地域福祉ネットワーク支援やNPO地域支援は、後ほどまたそれぞれ御発表いただければと思います。

これらの問題は、社会保障制度のそれぞれの縦割りの制度では解決できない、その制度の隙間に生じる問題です。介護や生活保護、あるいは障害者福祉は、様々な社会保障の制度がありますが、そこのどこにも落ちていかない、はざまに生じる問題ですから、孤独・孤立という観点から施策の横串を刺すという今回の政府の取組は、大変時宜にかなったものですし、期待をしているところです。

神戸市は、こういう形でひきこもり支援、ヤングケアラーの支援、それ以外のものも進めてきたわけですが、これからどうしていったら良いのかということは、今、試行錯誤ですが、大きな方向性として考えているのは、一つは相談体制です。相談体制もただ電話ダイヤルをつくりました、あるいは窓口をつくりましたという待ちの姿勢では、この孤独・孤立の問題は対応できないだろう、社会に背を向けて助けを待っている人たちがいるということを前提に、どうやってそういう人たちに心を開いてもらって、相談につなげていくのかということ。ですから、寄り添った対応、そして、孤独・孤立の中にいる人たちに心を開いていただけるような対応をどうするのかということが非常に大事ということ です。

もう一つは、今日御出席いただいている民間団体の皆様方とどうコラボするのかという問題。これは今までもいろいろな長い歴史があるわけですが、これも新しい社会の局面の中で、どうコラボする仕組み、体制をつくっていくのかということ。この辺の話が非常に重要になってくるのではないかと。

結局、孤独・孤立の問題のキーワードは、つなぐということではないかと思います。神戸市は一昨年、たまたま「つなぐ課」という課をつくりました。つなぐ課は、神戸市のように、どうしても市役所の組織が大きくなって、それぞれの組織が縦割りになってしまう、下手をするとタコつぼ化するのをどうやって組織同士をつないでいくのか。本来、そうならないといけないのですけれども、行政の組織は、なかなかそうはならない。この組織をどうやってつなぐかということをするために、つなぐ課というのをつくったわけです。ひたすら組織の間をつなぐためだけの組織です。

そこから生まれたのが、ひきこもり支援室でした。ひきこもりのことをやっているのかというのを調べてみたら、教育委員会も、区役所の中でも生活支援のところ、場合によったら母子保健を担当しているところは、ひきこもりということについての相談を受けているのです。ただ、ひきこもりという現実はあるけれども、そこから先に進まない。

ですから、ひきこもりに苦しんでいる御家族あるいはその周りにいる人たちが相談できるように、一元的に相談する支援室をつくって、そしてそれぞれの情報を個人情報保護に

違反しないようにつないでいくということをやった。それがひきこもり支援室です。こういう形でつなぐということが非常に大事ではないだろうか。

これで最後にいたしますけれども、神戸でもそうですが、今、地域社会の中で、誰かのために役に立ちたいという市民の皆さんはたくさんいらっしゃる。社会のために貢献したいという企業もたくさんいる。そして、様々なNPOの皆さんも活動を広げたい。しかし、同時に支えてくれる人材、参加してくれる人材が欲しい、あるいは資金面での手当てを求めている人たちもたくさんいる。

このように役に立ちたいと思っている人、助けを待っている人、誰かを助けたいと思っている人、何らかの形で社会に貢献したいと思っている人、そして実際に活動している団体の皆さんをどうつなぐのかというネットワークづくり。つまり、点として存在しているものをどう線にし、この線をどう面にするのかということが、孤独・孤立というものを考えたときに、やはり非常に大きな、大事なことではないだろうか。

これは例えば個々に孤独・孤立対策に対する補助金、助成制度をつくるということ以前に、そういうネットワークをどうつくったら良いのか、つなぐということはどういうやり方で行っていったら良いのかということがスタートになるのではないかと。あるいはスタートだけではなくて、それが結果的にこの問題に対する大きな一歩を踏み出すということになって、解決につながっていくのではないかとという問題意識を最初にお話しさせていただきたいと思います。

私のお話は以上です。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 久元市長、どうもありがとうございました。

それでは、本日御参加の皆様から、順次、お話をいただきたいと思います。

長谷部様から順番に、時計回りで御指名いたしますので、よろしく願いいたします。

それでは、最初に、神戸市兵庫区社会福祉協議会地域支援課長の長谷部様、お願いいたします。

○長谷部氏 それでは、最初にお時間を頂戴いたします、社会福祉協議会の長谷部でございます。どうぞよろしく願いいたします。

今日の報告は、私の社会福祉協議会でのポストは、市長の資料の中にもありました地域福祉ネットワークという職種を担当させていただいておりまして、そのネットワークの仕事の一つとして、区内の社会福祉法人の連絡協議会の事務局を担当させていただいております。

その事務局が担当しております生活環境改善事業に取り組んでおりますので、その件につきましてお時間を頂戴したいと思います。

資料を見ながら進めていきたいと思うのですが、表紙の写真をどんと大きく載せさせていただいておりますけれども、これはその活動の現場そのものの写真でございます。

ちょっと分かりにくいので、解説を最初にさせていただきたいと思いますが、白い服に身を包んでいるメンバーは、皆さん社会福祉法人の職員でございます。法人の職員の皆さん

んが、兵庫区内でごみ屋敷があると、そこの方のいろいろな支援をしていく中で、御本人の意思に沿った形での生活環境の改善に取り組むという形になります。もちろん、無理やりどうこうするというものではなくて、御本人がいろいろなサービスを受け入れるために必要な片付けを社会福祉法人の職員の皆さんが支援していくという形になっています。

右側の方が左足を置いている場所を見ていただくと、何か四角いものの上にあるかと思うのですが、これは実はこの部屋に置いてあったストーブです。なので、今、ストーブの上に乗って作業をしていますが、これは作業開始から3時間後ぐらいなので、およそ10台のパッカー車分の廃棄物が出たのですが、それだけの時間がかかって、この方は、僕はストーブの上にいたのだと気付くという状況。

左側の人も、本当はちょっと進むと分かるのですが、実はこたつの上いらっしやいます。そのぐらいたくさんの物がたまって、独りで暮らしていらっしやって、入院を経て退院するに当たっての支援を行ったという現場でございます。

1枚めくっていただくと、これをやっているのがほっとかへんネットという団体なのですが、平成28年に結成した、兵庫区内での社会福祉施設を運営する26の社会福祉法人が協議体をつくって事業を行っています。地域公益活動をやっていくということですが、兵庫区におきましては、26全ての法人が加入して、このネットワークをつくっています。

どんなことをしているのというふうに資料に書かせていただきましたが、実はこれに限らず、いろいろな地域公益活動をやっているのですが、今回に関しては、その中の一つとしての生活環境改善事業だということで見えていただくと良いと思います。年間大体5～6件のごみ屋敷の片付けに取り組んできています。

「生活環境改善事業って？」となると、ごみ屋敷と呼ばれる住居で生活が困難になっている方に対し、本人同意を得ながら、これまで14世帯の生活環境を改善してきましたということになります。

対象者にどんな方が多いかという部分ですが、マスメディアに登場するようなごみ屋敷は非常に少数派で、あるのですが、とても少なく、むしろ福祉課題を抱えていて、急速にごみ屋敷化してしまったという事例が多くあって、その方の生活をどう立て直すかという部分があります。今日のテーマに関しては、必ずしも単身世帯ばかりではなく、家族間の会話がないなどの表に見えにくい孤独・孤立が見られることが間々ございます。これまで複数人世帯のごみ屋敷も片付けをしてきましたけれども、おおよそ会話がない、家族間の関係性が途切れているということが多いです。

これは今に始まった課題ではないのではないかと、そのとおりのことなのですが、社会の孤独・孤立が進んできたことや、マンションが増えて、隣近所が気付きにくくなった。そうすると、自分ではどうしようもできないような状況になって、初めて隣近所が気付くという状況になっています。

また、ごみ出しのルールが複雑になっていることも大きな原因の一つで、認知症が進んだり、軽い知的障害があると自分では捨てられないということが起きているのが現状です。

この人たちは、先ほど社会福祉法人の職員だという話をさせていただきましたけれども、多くの職員たちが自分の本来の仕事の中で細分化されていますので、そういう課題があるのだということに在宅サービスの提供の際や施設サービスの提供の際に気付いているのですけれども、それが自分の職務の中でやることができないというジレンマをずっと抱えていらっしやう。長い間働く中でそういった自分の苦い思い出のあった方たちが、このネットワークで誰かの家の片付けをしましょうというときになると、過去の自分の悔しい思い出に何とか抗いたいという感覚で手助けに参加してくださっている方が多くて、40人ぐらいの方が毎回参加してくださるという状況です。

私どもとしましては、この陰には隠れた孤独・孤立があると思っていて、最後の資料ですけれども、1軒の家の世帯主という形で世帯が構成されますが、どうも社会には、ごみ屋敷になっていらっしやる方の場合、えてして世帯主が何人もいる。全てではないですけれども、こういう現状があるような気がしています。

今、社協がやっている生活福祉資金の貸付けなんかでも、1つの家にたくさんの世帯主がいて、統計上は恐らく単身で計算されている人たちが1つの家にたくさん住んでいるという現象があって、このときに経済的にも、社会的にも大きな孤立を抱えているという状況があるので、世の中のあらゆる統計のデータの基礎となる部分で、孤独と単身の考え方がちょっとずれていってしまっているのではないかということが、私どもとしては大きな課題だと思っています。

以上です。ありがとうございました。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 長谷部様、ありがとうございました。

続きまして、月が丘ふれあいのまちづくり協議会委員長の福永様、お願いいたします。

○福永氏 月が丘ふれあいのまちづくり協議会の委員長の福永でございます。

ふれあいのまちづくり協議会というのは、神戸市独特の団体でございます。詳しいことは、この資料を見ていただいたら分かると思いますけれども、現在、月が丘ふれまちはどんな団体で構成されているかと言いますと、自治体、婦人会はなくなりまして、民生児童委員会、それから老人クラブ、子供会も少子化でなくなりまして、青少協、学校開放とかボランティアグループ、NPO法人、マンションの管理組合という団体でふれまちは構成されております。

行事と言いましたら、福祉から防災・防犯、コミュニティーづくりの事業運営部会、広報誌発行というのを全てしております。ですから、事業としたら、地域を活性化するあらゆるものをしております。

現在、そういう中から、最近といっても5年ぐらい前なのですが「月が丘わんぱくクラブ」というのを一つ福祉部会で立ち上げました。これに関しても、もともとお母さん方から、是非こういう団体をつくってほしい、こういう事業をしてほしいという要望がありましてつくったのです。

というのは、学童保育とかそういうのはあるのですけれども、そのほかにお母さん方が

急に用事ができたとき、子供を預ける場所がない、それから、パートで働きに行っているのに、子供を預ける場所がないというのでわんぱくクラブを立ち上げました。小学校から直接帰ってきて、宿題を見て、おやつを食べて、あとは自由に遊んでというクラブです。

その中で、月が丘という地域は、神戸市が分譲してつくられた町なのです。ですから、皆さん持家で、マンションもあるのですけれども、マンションも皆さん自分で持っているマンションなのです。そういう中で、生活は割と安定している方が多いのですけれども、わんぱくクラブをやっている、中にはちょっと大変なことを抱えているなどというのが見えてくるのです。

いつぞや、公園で子供たちを遊ばせていたら、わんぱくクラブの別の子供が、あるお母さんがいたのですけれども、福永さん、あのお母さん、公園でお酒を飲んでいるよという話が来まして、私は近寄っていろいろと話していたら、子供が3人いて、3人ともそれぞれ軽い障害を抱えているのです。去年の話なのですけれども、コロナ禍で、子供たちといると何か行き詰まってしまって、どうしようもなく、公園に出てきて、それでコープでお酒を買って飲んでいると言っていたのです。私もその缶がお酒というのに全然気が付かなくて、言ってきたわんぱくの子供が、うちのお母さんが毎晩お父さんと一緒に晩酌で飲んでいる缶だと言うのです。それで、その子供がそれをお酒というのに気が付いて、私に教えてきてくれたのです。

そのお母さんに対していろいろ話をしあって、何かいろいろとストレスを抱えているというのが分かりまして、学校にも連絡しまして、学校でこういう方がいますけれどもと言いましたら、話をよく聞きますという返事でした。それから、西区のこども家庭支援室にも電話をしまして、こういう方がいますからというので話をさせていただいて、そのつながりも、いつかそのお母さんとお話ししましたという話も聞きました。

それからちょくちょくわんぱくクラブに子供を連れて出入りするようになって、だんだん落ち着いてきて、今ではちょっと嫌なことがあったりすると、割と何でもすぐに話をしてくれるようになるのです。そんなことが、わんぱくクラブをやっている、月が丘もいろいろな問題があるのだなというのを感じたことです。

子育て支援なんかでも、パンダといって、赤ちゃんを支援するクラブをつくっているのですけれども、そういう中でも若いお父さん方が、今、赤ちゃんの社会性が育つかどうか、すごく心配していると言うのです。うちのほうは押部谷保育所といって、満杯ではなくて、割と空きがあるのです。その保育所の先生が、去年の秋から途中で保育所に入所する赤ちゃんが多いと。やはり親御さんがお子さんの社会性が育たないと心配して、少しでもつながりができるように保育所に預けるようになったのかなと感じました。

そうかといって、福祉センターを使ってふれまちでパンダというのをやっているのですけれども、そこにはここ1年ぐらい1～2組で、最近やっと5組ぐらい集まるようになったのです。ですから、お母さん方も一緒にするということがすごく怖がっているみたいで、そうかといって、地域に横のつながりをつくるような、お母さん方が集まっているいろいろな

悩み、子育ての悩みをしたりするような場所がなくなったら困ると思うので、パンダを主催している責任者には、これは続けてね、地域には絶対にこういうお母さん方が赤ちゃんなんかを連れてきて、ちょっとお茶を飲んだり、子供の相談をしたり、悩みを言ったりする場所は絶対に必要ですというので、今でも細々ながらも続けるように努力はしております。

そのほかに、障害者なんかも、10年ぐらい前までは、知的障害者と精神障害者の作業所が月が丘にございまして、そこの人たちの交流の場に福祉センターを使っていたいただきました。ふれまちの役員も入って運営していたのですけれども、それが国の事業の変更で、作業所が1つはなくなって、もう一つは大きな法人に吸収されたのですが、それからでも福祉センターに1週間に2回ぐらいは体操教室や障害者の交流とか、そういうので福祉センターを使っていたのでしたのですけれども、このコロナで福祉作業所というか、法人自体が皆さんのところに参加できなくなってしまって、このところ、障害を持った方たちと交流できないのがとても気になっております。

そういうことで、高齢者にしても、認知症が増えました。いつも下を向いているような鬱の方も増えました。それから、立っていて、ちょっとふらっとしたりして、足が大丈夫かな、立ってられるかなというような方も増えました。ですから、福祉センターを使って、これからもそういう方たちが少しでもまた集えて、そういう状態から少しでも進まないように、事業は細々ながら何とか続けていくつもりです。

ですから、大きな運動会や文化祭とかはできなくなりましたが、小さい事業を積み重ねながら、例えばこの前も木工教室というのをやったのですが、そこにも何人か来てくれて、そういうことで事業を続けております。ですから、少しでも地域の皆さんがそれ以上悪い状態にならないように、福祉センターに来てもらって、いろいろな事業を少しずつ続けることが大事かなと今思っております。

以上です。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 福永様、ありがとうございました。

続きまして、NPO法人インクルひろば代表理事の松岡様、お願いいたします。

○松岡氏 インクルひろばの松岡です。よろしくお願いいたします。

私どもは、食べることを通じて、人が地域の中でつながっていくというのを目標として活動している団体です。まだ3～4年しかたっていない団体ではあります。

今、活動しているのは、神戸市の北区の南五葉です。高齢化が進んで、少子化も進んでいる町です。古い公団の多い町です。

その中で、私どもがやっている活動は、高齢者も、子供も、障害のある方も、全ての方が町の中で顔見知りの関係ができるようなものをしたいということで、いろいろなイベント等も行っていました。その中で一番の柱は、子ども食堂です。毎週木曜日の夜に子ども食堂を続けています。ただ、誰でも来られる場所を設置していた居場所だったのですが、ほかの活動については、コロナの中で集うことがなかなか難しくなりましたので、できな

くなりました。

そこで、我々が力を入れているのは、宅配のお弁当です。食を届けるという形でしています。誰かと一緒に御飯を食べることはできなくても、それをお届けするというこゝでつながっていこうということをしています。今日は、その中で、つながり方を2例御紹介したいと思います。

1つは、カフェとかがなくなっても、視覚障害のある方とのつながり。この方は視覚障害があるのですが、完全に独り暮らしで身寄りがないという状態です。宅配弁当をずっと利用されているのですが、昼もどこでもなくというと、ずっと宅配のお弁当箱で食べているという状態になります。

そうすると、自然と孤立してくるという状態も予想されるわけで、そういうことを考えたときに、スタッフの中から、閉めているカフェではありますけれども、必要性のある方はそこに来ていただいて、スタッフとだけれども、ちょっと談笑しながら食事ができるようにしようという取組を続けています。また、この方は目が悪い方なので、郵便物を代読してあげたりとか、御自宅にお届けした際には、少しだけその人に必要なお手伝いをするという形でつながり続けていく。

2つ目の例なのですが、これはスクールソーシャルワーカーのほうから、最近、ちょっと食べることが心配なので、この子をどうにかして子ども食堂につなげることができないかというような相談をされることのあるのですが、御本人が自分で出向いていただかないとなかなか難しいということで様子を見ていたのですが、コロナになったときに、去年、神戸市の力もお借りしましたが、私どもはコロナで留守番している家庭の子供にお弁当を届けるという活動をしていました。

その中で、逆に今ならうちのほうからお弁当をお届けすることができますよという提案をスクールソーシャルワーカーにしましたら、スクールソーシャルワーカーが御家庭のほうに話していただいて、喜んでいただいたのです。そこから宅配を始めていきました。学校が始まったら、形としては宅配をやめたのですが、その家庭には恐らく必要だろうということで、ずっとそれを続けて、現在も続けています。

初めは、お弁当は欲しいのだけれども、私たちと会うのは嫌だったみたいで、玄関の戸にそのままかけておいてくださいと言われて、では、置いておきますねとさっさと帰っていたのですが、そのうちだんだん時々話すようになって、それを重ねていったときに、ちょっと話したときに家のドアの隙間から見えるおうちが何か結構大変なことになっているなという感じが見えてきて、それをしているうちに、またふとした瞬間に掃除が大変だったらちょっと手伝いますよみたいな乗りで話していたら、お母さんがうんと言うときがありまして、では、私たちが手伝いますよとみんな代わる代わる手伝ったのです。結構軽い気持ちで手伝ったのですが、それがさっき紹介がありました結構なごみ屋敷状態になっていて、いろいろなことが分かってきたのですけれども、その人たちはごみの上に布団を敷いて寝ていた、長いことトイレが使いえなかったという状態が分かってきたのです。

私どももそういうノウハウはないので、いろいろな機関の人とつながっていくのですが、その人に合わせて活動をするということを心がけてはいるのですが、機関とつながっていったときに、なかなか事が進まなくなる。

それは親子という問題で、何でも親の同意が要るところで行き詰まってしまう問題があるのですが、問題に立ち向かうときに、大人はゆっくりかけて支援をしていっても良いと思うのですが、その子供たちがちょっと心を開いてくれたときに入っていける連携の仕方が形になっていかないかなというのは、今のところの課題だとすごく思っています。

以上です。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 松岡様、ありがとうございます。

続きまして、社会福祉法人すいせい理事長の岸田様、お願いいたします。

○岸田氏 社会福祉法人すいせいの岸田です。よろしくお願いします。

私からは、障害、若者、仕事をキーワードにお話しさせていただこうと思います。

うちの法人のことなのですが、社会福祉法人すいせいは、もともと昭和59年に精神障害の御家族の方が、自分たちの子供の行く場所が欲しいということでスタートした法人です。そこから相談であったり、就労訓練ということをやってきました。近年では、発達障害の方の就労もですし、もっと言うと、発達障害がなくても働きづらい大学生とか若いひきこもりの方はたくさんおられるので、そういった働きづらい人、生きづらい方の支援ということを心がけて今やっております。

次のページにあるのですが、私が5年前に就任したときに、生きづらさということに対して、健康と自信と希望を提供するというのを法人としてのミッションとして掲げて活動しています。法人としては、まず「Social work」は福祉なので、福祉を中心にしながら、もう一方で「Science」で、今はウェアラブルとかテクノロジーを使ってストレスを測るとか、脳科学や人体といったこともしっかりとしながら支援をしていくということと、若い方の支援をするときに、おしゃれではないと若い人は来たいと思ってくれないので、そういったおしゃれさというデザインもですし、もう一方で構造、仕組みという意味でも「Design」をしていく必要があると思っていますので、今、そういったメソッドをつくっていくということもやっている法人です。そういったことをしながら、下に書いてあるような精神障害の方の就労であったり、企業のメンタルヘルス、児童養護の卒後であったり、近年ではひきこもりの支援といったことをやっています。

次のページですが、実際にどんな事例があるかを挙げているのですが、一つの例として「Sample①」では、障害のある方で長時間働きづらい方はやはり多くおられるのですが、神戸市は、平成29年から東京大学先端科学技術研究センターと連携して、超短時間就労という、今よく言われるジョブ型雇用といったものを入れていけば、より多くの方が社会参加できるのではないかという試みをされています。

うちもそこを一緒にさせていただいていまして、ジョブ型雇用を使って、垂水商店街で

は、今、若い人がなかなか来ない、働き手としていなくて人手不足という商店街の課題があるので、そこを掛け合わせることで、みんながプラスになることはできないかということにチャレンジしてきました。現在は、5社の商店街の方が協力してくださって、そこに障害のある方が1週間で1時間だけという人もおられますし、週に2回、1日3時間といういろいろな働き方をして、商店街の方も、自分たちも少し時間ができてプラスになったと言ってくださいますし、障害があつてずっと働けなかった人も、誰かからありがとうと言われてとてもうれしかったということをやっています。

もう一点の「Sample②」という例でいくと、ひきこもりの就労相談窓口で、先ほど市長からもお話があったように、神戸市もひきこもりのことをやり出して、今、就労のところの委託を受けさせていただいています。これはひきこもりの方の訓練もしながら、御本人も自分は何が得意かもなかなか分からなくなっている方が多いので、僕らは今までのノウハウを使って、どういうところがあなたの強みですというのをフィードバックしていきます。そこでまた企業にも協力させていただいて、中小企業家同友会という企業団体であったり、近年ではJC（青年会議所）とかにも協力させていただいて、超短時間就労でひきこもりの人をマッチングするというのも今やっています。

実際に、10年ぐらい引き籠もった方でも、自分の強みが分かって、それだったらこういう職種だったら自分にできるかとなったときに、企業の方も、実はこういう人を募集している、この部分だけ助けてもらいたいという企業が多くあるので、その人手不足に今まで働けなかった人をマッチングしていくといったことを今やっています。これはとても効果的だと思うので、神戸市のひきこもりの窓口で超短時間というものがうまくはまった事例というのも去年からでき始めています。

あと、ほっとかへんネットたるみのほうで代表もさせていただいたので、うちのほうでも地域課題にも取り組みたいということで、今、古民家カフェをつくりました。古民家カフェでは、写真にあるように、いろいろな人が参加できるように、ここではペンキ塗りで、地域でちょっと引き籠もりがちの子がいたり、職員の子供もいるのですけれども、一緒にペンキを塗る。世話をしてあげるではなくて、みんなに役に立ってもらおうということを提案しています。独居の高齢者の方で農業をやっているおじいちゃんと若者で土を触りたい方なんかもマッチングすると、お互いにウィン・ウィンになるので、そういったことをやったりしています。垂水区を混ぜていくということをして、みんなが機能することができればと思います。

次のページで、孤立に関していくと、解決すると思ったときには、役に立つということが重要かなと思っています。なので、誰かからありがとうと言われることが増えれば、孤立というものは解決していくのではないかと思うので、その方の強みを見つけて役割を渡していく。それは仕事というのが一番分かりやすいのかなと思って、私たちは今、そこに力を入れています。

すいせいからは以上です。ありがとうございました。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 岸田様、ありがとうございます。

続きまして、公益財団法人ひょうごコミュニティ財団代表理事の実吉様、お願いいたします。

○実吉氏 皆さん、こんにちは。今日は、こういう貴重な場を与えていただきまして、ありがとうございます。

私は、今までの発表の方ほぼ全てが、現場の直接の支援活動の事例を御報告いただいたと思います。

私は少し立場が違って、どうすればそういった民間の支援活動、市民の活動、住民の活動がこの神戸で、あるいは兵庫でもっと盛んになって、つながって、助け合いの地域社会をつくっていけるのか。私はあまりその言葉を使わないのですが、中間支援と呼ばれたりする間接的な支援、現場の支援者を更に支援するというのをテーマとしております。

最近、私がやっているのは、お手元の資料で、タイトルは「『支え合いの文化』をいかに広げるか」としましたが、その次で、いくつかの団体に関わっているのですが、その中の2番目のひょうごコミュニティ財団は、主に資金面で御寄附を募ってお預かりして、それでNPO等の活動に資金助成をして資金面で応援する。ただ、資金面だけだと全然足りないと我々はやりながらすぐに気が付いたので、非資金的な支援の2つをやっております。

そういう活動の中から幾つか見えてきて、今日の孤独・孤立というテーマに関わる幾つかのことがあるなと思いましたので、それを話させていただきます。

次のページで、深刻化する孤独・孤立にどう対処するのか。この1年半、私どもが御支援させていただいている団体は、年によって違うのですが、年間の助成先が大体70~100余りあるのですが、どの団体も非常に苦しんでいらっしゃいました。

今年1月に調査をして、その調査からいろいろな声も上がってきたのですが、まずは支援する対象の利用者、当事者の方で、先ほどの視覚障害の方であるとか、例えば難病持ちの方で、絶対にかかりたくない、外には出られないとか、日本語が分からない方とか、それをハンデとはあまり呼びたくないのですが、ある意味ではいろいろな社会的なハンデを負っている方を御支援している。その当事者、利用者の方の状況がどんどん深刻になっている。もっと支援しなければいけないと現場の皆さんが肌身でひしひしと感じていらっしゃるという声がたくさん出てまいりました。

その一方で、コロナですので、ボランティアがおり、会員がおり、職員、役員がおり、そういう支援されている皆さん自身の安全も図らないといけない。支援する人が倒れてしまっちは元も子もないですし、皆さんある種の恐怖や不安も感じながら、でも、目の前で困り方がふだんよりももっと深くなっている、どうしたら良いのだろうというジレンマの中、例えばリモートを活用するとか、何とか物理的な距離を開けながら人数を減らしてやるとか、皆さん物すごくいろいろと工夫しながらやってこられた中で、そのジレンマに苦しみながら、我々こういう民間のNPO、市民活動のセーフティーネットの力が頑張ってもちよっと低下するような中で、一方で市民によるセーフティーネットの上に乗っていると

うとちょっと表現が変ですが、そこが支えている市民の皆さんの状況がどんどん悪化する、その状況をどうすれば良いのかということです。

お手元の私のスライドで、今しんどい思いをしている人への対症療法という言葉はちょっとよくないかもしれませんが、そういう方に手を差し伸べたり、御支援をするのは当然必要ですけれども、多分、それだけの話ではないのではないかと。冒頭に市長が大都市のという話もされましたが、孤独・孤立は、都市もですし、仮に都市ではなくても、私たちの社会がこの10年、20年、もしかしたらもっと長い変化の中で、社会の在り方そのものももっとよりよくなっていかないと、見直していかないといけない部分があるのではないかと。

孤独・孤立というと当然、当事者への福祉的な支援というのがまず来ますけれども、例えば文化・芸術やスポーツ、まちづくりとか、場合によっては国際協力の支援といったものも実は回り回って社会の孤独・孤立を解消していく役割があるのだろうと。なので、この政府（政治）と経済（企業）以外の社会というのをどう分厚くできるかというのが、間接支援をテーマにしている私たちの大テーマでございます。

ちょっと飛ばします。うちは、偉そうなことを言いながら、常勤職員1人というちっぽけな団体で、まだできて8年経ったところです。おかげさまでこれぐらいの規模になってきましたが、まだまだ小さい団体です。

次は事業内容です。さっきも申し上げたように、寄附を原資としてNPOへの資金助成をする。これが一番の柱なのですが、「NPO等の支援」。「等」は、任意団体も、社会福祉法人も、一般社団法人も、地縁団体も、あらゆる活動を含みます。それを横につなげてまいりました。資金助成がメインなのですが、さっき申し上げたように、お金以外の支援もたくさん必要になってくる。

それと、これは今から申し上げたいことなのですが、我々の場合はお金が一番のテーマですが、お金の面でこういった市民の活動を応援しようという寄附者はまだまだいる。資源はあるところにはちゃんとある。ただ、この1番と2番で、寄附者と現場で支援しているNPOがなかなかつながっていない。そこを何とかもっとつないでいきたい、つなぎさえすれば、この社会にまだまだ資源は眠っているというのが8年間やってきた実感でございます。

次のページで、2つほど例がありますが、詳しくお話ししている時間はないのですが、1つ目の有園博子基金というのは、遺言書でお気持ちを遺してくださった基金です。DVの被害者や性暴力の被害者の支援をやって、今年でまだ3年目です。

ここは、特徴としましては、助成というと、事業への助成が圧倒的に多いのですが、事業の支援もしますけれども、共助の社会をつくっていく中で、民間の支援団体・支援者の、かっこよく言うとキャパシティビルディングとあって、どうやって団体が成長し、活動を長く持続して続けていくかという部分がなかなか弱いところでもありますので、組織基盤強化というのを研修をしたり、ネットワークづくりをしたり、伴走支援、アドバイザー派遣という形でやったりというので、ここは非資金的支援をかなり重点的にやっております。

2つ目は、コロナの支援の基金で、ここの特徴は、地域みんなのネットワークでやっているのです。うちの財団だけではなく、実行委員会をつくって、多くの方々の力でやっております。

うちの支援先は、延べ数で320件ほどで、団体数でいうと累計で200団体ほどありますが、分野でいうと全てあります。

次のページで、法人格の種類や設立の年数とかがありますが、右側の設立年の円グラフで一番多いのが左上のブルーです。これは設立してまだ5～6年ぐらいです。ということは、公募でやっていますので、我々が資金助成を募集していくと、新しい団体がどんどん出てきている。昨年のコロナで、よし、頑張ろうとって始まった活動も8団体ある。

法人格もいろいろです。任意団体がたくさんあります。規模でいうと、基本的には小さい団体がたくさんございます。

次のページが、うちの自慢のように見えるかもしれませんが、言いたいことは、うちがどうということよりも、ちゃんと寄附を集めさえすれば、まだまだ社会にはお金はある。人あるいは地域の活動にお金を出したい、お金を出すということで社会に役立ちたいという方は、潜在的にはまだまだいらっしゃる。それがお金のないNPOと出したい方とがなかなかつながっていない。

今はおかげさまで何とか累計で2億ぐらいの寄附を集めてまいりました。我々はこの資金集め＝ファンドレイズに、多分、活動全体のまだ5～6%ぐらいのエネルギーしか割けていないので、もっと20～30%割かないといけないのですが、まだまだこんなものではない、まだまだ全然と思っています。こういったことから、活動していく資源はあると。

先ほど来皆さんもお話しされていましたが、地域の人たちで何か役に立ちたいという方は本当にたくさんいらっしゃる。機会さえあれば、あるいはそういう場に参加できるチャンスさえあれば、普通のおっちゃん、おばちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃんて何か人の役に立ちたいという方はまだまだ幾らでもいる。そういう活動を支える資金も、きちんと集めさえすれば、つなぎさえすればあるのだと。

ただ、ないのは、そこをつなげていく力、あるいはつながっていく力、あるいはそういう市民の活動がこの社会でものすごく大事なのだという市民活動やNPOの認知度もまだまだ社会の中では市民権を得ていないのかなと。そういう中で支えていく組織や官民の連携がもっと必要なのではないかと考えております。

もう時間があれですので、飛ばしまして、大臣にはお手元にお届けしていませんが、会場では追加で。アップで見ていただくと。ここ1週間でいろいろな方からお話が聞こえて。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 大臣にも届いています。

○実吉氏 ありがとうございます。

行政がいろいろな支援を強化していく。これはいろいろな試みをされていますし、その中でNPOとか市民活動団体と一緒にやっっていこうと。それはすばらしいことだと思います。

ただ、その支援で、行政がやろうとしている支援に、これは全て含んでいます、NPO等を活用するというのと、そういった担い手を育てるということは明確に分けないと、この2つがよく混在しているのです。

左下に書いていますが、どうしても行政は時間のタームが単年度になる、あるいはエリアで、例えば神戸市でいうと、9つの区に全て満遍なくないと具合が悪いと。

市民の活動は、基本的に自発的なので、まばらで、まだらで、まちまちなのです。しかも、市民の活動が育っていくのはすごく時間がかかる。それをじっくりと待ちながら、支援を一緒にやりましょう、お金を出しますからこれをやってくださいという部分と、市民の活動やその支援者を育てるというのは明確に分けないと、お金を出しても、結局それで団体が疲弊するというのも山ほど見てまいりました。

真ん中の部分は、成果を出す。インパクト評価とか、お金を出して良い成果を出すというのがどうしても目立ちがちで、サービス提供や課題解決というのが最近はやりで中心になりがちなのですが、地域の中では、小さい団体、中小の団体がそこにあるということそのものがすばらしい価値を持っています。その小さい団体が、短期でこんな数字を上げましたというのはなかなか難しいし、そういうのを求めていくとどんどん無理がかかる。そうではなく、そういう中小の団体があちこちにどんどん生まれている、神戸という町全体がそういう活動を大事にして、ウェルカムで待っています、応援しますというムードをつくっていくことが大事なのではないか。

まさにつなぐと市長もおっしゃっていましたが、右下の市民や企業の参加をどう拡大するかは、いろいろとやるべきことがありますし、制度的な課題もあります。具体的な提案もいろいろとありますが、長くなりましたので。まさにこのつなぐという部分にもっと力を入れないといけないのではないかと考えております。

以上です。ありがとうございました。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 実吉様、ありがとうございました。

実吉様のお話が終わりました、本日御出席いただいた方々からのお話は一巡いたしましたので、神戸会場のプレスの方は、ここで一旦御退室をお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。

(報道関係者退室(神戸会場))

○谷内孤独・孤立対策担当室長 それでは、これから自由に意見交換を行いたいと思います。時間にして、2時55分ぐらいまで自由に意見交換をいたしたいと思いますので、今から30分間程度、皆様から更にお話をいただきたいと思います。

もともと5分程度のお話ということで、なかなか言い足りなかったということもおありだと思いますし、今日のお話を聞いて、まだこういうことを言いたいということもあると思いますので、皆様から挙手をしていただいて、私から指名させていただきますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、どなたでも結構ですけれども。

では、市長、お願いいたします。

○久元神戸市長 このつなぐということは、さっきも実吉さんがおっしゃったのですけれども、孤独・孤立を考えたときに、自然につながるといのがなかなか難しいものになりますね。

そのときに、今日、一つのヒントをいただいたのは、松岡さんのお話で、酒臭いお母さんがいて、公園のお話。それでごみ屋敷になっていたと。

○福永氏 いえ、それは違います。

○久元神戸市長 ごみ屋敷に。酒臭い人とこんがらがってすみません。

ごみ屋敷になっていたけれども、ドアの前にお弁当を置いてくれと。だんだん話ができるようになって、そっと中を見て、中がごみ屋敷みたいになっているということが分かって、そこから掃除をしましょうかというふうに入っていったわけですね。

それはすごく難しいことなのだけれども、何らかのきっかけというか、あるいは接し方というか、それでそのお母さんと松岡さんのところのNPO法人がつながったということかなと思うのですが、このような出会いというか、つながり方ということを広げていくことはどんな知恵があるのか。

長谷部さんはそういう経験もたくさんおありだろうから、福永さんも含めて、その辺のことをちょっと聞かせていただければと。課題を抱えている方とどうしたらつながるのかというヒントをいただければと。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 では、長谷部様、お願いいたします。

○長谷部氏 先に私から。

一つは、私は、特に1995年の阪神・淡路大震災をきっかけに神戸にやってきた組なのですけれども、あの当時、私たち社会福祉協議会はボランティアセンターを運営しているので、ボランティア活動の支援というのは本道の本道なのですが、当時、よくボランティアとは自ら進んでやるものだということを言っていて、それでずっと来たのですけれども、このところ、統計とかいろいろなアンケートの結果を見ると、どうもちょっと違うなということが分かってきた。ほとんどの活動者は、始めたきっかけは、誰かに誘われているのです。続ける理由は自発的なのですけれども、最初の一步は、誘うということなのです。自発性ということを使い過ぎて、自ら進んでやる人ばかりを待っていたという時代が長く続いてしまっていたことを最近我々は反省しています。

最初は、1回だけでも良いからとか、ここだけでも良いからと言って、本来の全体的な狙いの部分を切り分けて、小さく誘うということがちょっと苦手になった世代が支援者の中にも多くなってきているという現実があって、先ほどの扉を開けてどう声をかけるかではないのですけれども、促すとか誘うということを支援のプロセスの中でとてもやってこなかった10年ぐらいがあるのです。

そこを私たちは形としてつくっていかなければいけなくて、国の統計等いろいろとあり

ますけれども、どんな統計を見ても社会の役に立ちたいという人はたくさんいて、では、なぜしていないのですかという問いに対しては、ほとんどが誘われなかったからと答えているのです。これははっきりしていて、自発性を待ってしまっているのです。

そうではなくて、活動者の側も、支援を受ける人に対しても、どのような誘い方をするのかという力をつけなければいけないと私たちは思っていて、支援を受け入れる意味でも、娘さんのことでねと声をかけるにしても、いろいろなテクニックやその場その場での声かけの仕方というのがあるので、そういった誘う力、私はメッセージのほうにも「促す力」という表現で書きましたけれども、参加の力を促すとか、社会に関わる力を促すという力をもっと大事にして、世の中に広めていかなければいけないのではないかと私たちは思っています。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 では、松岡様、お願いいたします。

○松岡氏 私は、なぜ食べるということをテーマにしたかというのと、誰もが必ずすることだから。

食べるときには、みんな少しリラックスするので、自分の利害と関係なく人と出会ったときにするのは、一番人間がほっとする場であると思うし、だから、みんな同じものの中で話をするきっかけをつくっていく、それを無理しないで重ねていく、ずっとつなげていくことは大事なことなのではないかと思って、寄り添うには、その人が得意なことから、その人のできることから一緒に話していく、やっていくということが必要なことなのではないかと思って活動しています。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 では、福永様、お願いいたします。

○福永氏 月が丘の場合は、いろいろな小さな団体が集まってふれまちというものをつくっています。そこからいろいろな情報が上がってきて、例えば認知症の講習会をしたときに、警察の認知症の人たちへの対応が悪いなんていう話を聞いたりしたら、警察の生活安全課にもつながっているから、そこに講習会をしていただけませんかとか、例えば社協なんかにも声をかけて、警察に行ったら、今、コロナでやりにくい雰囲気だから、社協から講習会の声をかけてきてありがたいみたいなことを言うので、そちらの社協に言って、警察に講習会をしませんかということをしてもらうのです。ですから、いろいろな団体が集まっていると、そこからいろいろな問題が出てきて、それでもって、これは社協に振ろうとか、老人会でもこれをしてくれるとか、いろいろな問題を解決してくれそうなどところがあるのです。そういうところを通じてやっていっているのです。

ですから、その認知症に対する警察の態度が悪いというのも、それを言ったら、いつか新聞で警察で認知症の講習会をしましたと。やったと思いました。その後、私が担当している認知症の方がお金を取られたと言うので、警察に行くわけです。それでも、ちゃんと対応してくれた、帰りにパトカーに乗せてもらってうちまで送ってくれたと。やはり言ったほうが効果はあるのだなと思いました。

だから、公園でお酒を飲んでいたお母さんの問題も、学校に言ったり、西区に言ったり

して、そのお母さんもだんだんと鬱憤を晴らすところ、話すところが増えて、結局、気持ち軽くなってくるというのがあるので、やはりいろいろな団体を知っておく、ここだったらこんなことをしてくれるというのを知っておくということもすごく大事ではないかと思えます。

例えばごみ屋敷の問題も、今、こちらでもすごく悩んでいる問題なのですが、そのようなものは社協なんかも関わってくださってやっているのですが、やはり障害を持っている方は、年がいくとごみ屋敷になりやすいです。

○長谷部氏 ごみを捨てるという行為は、割と難しいのです。毎週決まった日に、ルールに伴って捨てる。間違っ捨てると叱られてしまったりとかは割とあるし、私は、仕事でひきこもりの方と一目会いたくて、朝4時からずっとごみ捨て場で本人が出てくるのを待っているときがあるので、そのときに気付いたことは、割と独り暮らしのお年寄りが、スーパーの袋みたいなものにごみを入れて、周りを気にしながらこそこそと来て、人が捨てたごみ袋を開けて、そこに置いてさっと帰るということをやるのです。要は、通常のごみ袋は高価だし、かといって人にそんな姿を見られたくない。

どうですか、お姉さま方。昔、ごみ捨て場でよく会話をしていたでしょう。今はそれができなくなっているのです。ごみを捨てる姿を人に見られたくないと。

ごみ捨てのルールは、もう一つ次の段階にアップデートしなければいけないような気が私はしています。難しいし、ごみを捨てること自体が孤立を生んでいる可能性があると思っていて、結局、人前で堂々と捨てられる形を何とか実現し、かつ環境にも配慮してということが生み出せないかなとよく思っています。

○久元神戸市長 それはどうしてなのですか。ごみを捨てるのを見られるのが嫌だというのは、どういう心理状態ですか。

○長谷部氏 一つは、特に高齢者の独り暮らしなんかは、1人分の1回分のごみの量は、神戸市の指定のごみ袋1杯分にはならないのです。もちろん、小さい袋もあるので、だとして、誰かのごみ袋の隙間に入れてしまったほうが経済的にも良いし、言ってみたら、そういうことをいけないと思いつつもこっそりとやっているその姿を見られたくない。そして、自分のごみをぽんと出すときに、間違っている姿も見られたくないということと相まって、人前でごみを捨てるということを避けていらっしゃる方がすごく多い。一度、早朝から夕方までごみ捨て場を見ておくと、そういう方が1人や2人というレベルではないのです。こっそりとごみを捨てに来られます。

ごみ捨てのルールは、市町村によって全然違うので、今、神戸市の例で少しお話ししていますけれども、次のステージが要るのではないかと、昔でいう井戸端みたいに、ごみ捨て場で楽しくしゃべれるような環境が本当は要るのではないかと僕はちょっと思っています。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 岸田さん、同じ流れでも結構ですし、別の切り口でも結構ですので、何か。

○岸田氏 今、お話を聞きながら、僕は地元が鳥取なのですけれども、鳥取は結構田舎なので、人が交ざっているような感覚があって、こっち側は交ざり感が少ないなど。

考えてみると、田舎だとお寺があって、お寺にみんなが夏祭りとかで集まって、何か困ってお寺に相談したら、それだったら誰誰さんがもしかしたら解決できるかもしれないよみたいなことを言ってくれていたなというのを地域づくりをするときに思い出して、古民家カフェなんかも昔のお寺みたいなことができる、制度とかそういうことではなくて、地域の人たちがみんな何か持ち寄りたり、情報であったりというのが自然な形でつながりができる。

それが理想なのかなと思って今やっているのですけれども、そういった情報が集まる拠点、しかも、それがラフに集まるというか、そういうことができると、障害だけではなくて、子育て世帯のお母さんとかシングルマザーの方なんかも、ほっとかへんネットでアンケートを取ったときに、シングルマザーの方と独居老人の高齢の方は不安が高くて、日常は回るのですけれども、もし何か起きたときにどうするのだろうという不安が常にありそうなのです。これは垂水の小学校区2つで取ったアンケートですけれども、多分、全国的にも同じような数字になるのかなとは思っているので、最近、イレギュラーが起きたときにさっと動けるような体制が必要なのだろうなというのを感じながら地域づくりをやっています。

誰かに振れたら良いのですけれども。

○福永氏 神戸の場合は、まさに今、福祉センターがお寺的役割を果たすべきだと思うのです。本当に赤ちゃんから高齢者、ましてや犬・猫の問題まで来るのです。だから、やはり福祉センター、ふれまち自体がいろいろな団体を知っているということがすごく大事だし、実際に今、犬・猫の問題も月が丘の場合は全然ないのですね。「ねこクラブたま」という地域猫の会があって、神戸市は猫との共生もやっているから、不妊手術は無料になっているから、そういうのもある。

だから、地域で福祉センターでなくても良いから、どこかいろいろな情報が集まる場所がある、お寺代わりになるものがあるというのはとても必要だと思います。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 松岡さん、お願いします。

○松岡氏 そういった点でいうと、うちは月が丘と対照的で、西鈴に住んでいる人たちは、実はうちのスタッフの中にはほとんどいないのです。仕事の何かの関わりを持ってきている人、私自身も西鈴と出会ったのは、前の職場の関係で出会っているのです。

ただ、そこは自治会も高齢化が進んできて、あまり活発でなくて、でも、私たちの世代でそこで出会った人たちが、でも、何か優しい町にしたいねという思いがあったので、自発的にやった。高齢者の人は何かあったときに寂しいね、不安だねと。それを聞いたときに、では、いつも開いているような形で、いつでも御飯が食べられるカフェみたいで、喫茶店と何が違うのかというと、福祉的な部分も少し知識がありということと、いろいろな人がやってきます。

子供の居場所という部分考えたときに、子供の居場所は、学校でもない、家でもない、自分がちょっと自由にできるところと思って来ているのではないかと思います。だから、付き合いを重ねていくとだんだんいろいろなものが見えてくる。

だから、小学生はあれですけども、どこの誰誰さんではなくても来られる場所というのが地域の中であって、そこがあんしんすこやかセンターだったり、高齢者おのおのの分担するところとある程度つながっている部分と顔見知りの関係でありながらやっていける居場所というのが、今は大人にとっても必要になっていっているのではないかと。高齢者の人にとっても、福祉だけではなかなか支え切れないものをちょっと話したい場所というのが要るのではないかと日々感じています。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 実吉様、発表の中で時間がないとおっしゃっていただきましたこともありまして、この流れの中、まだ言い足りないことをまとめてどうぞお願いいたします。

○実吉氏 ありがとうございます。

先ほどのごみの話は、ごく思いつきのアイデアなのですが、一番小さい袋は15リットルで、10枚とか20枚で100何円。5リットルのものを作って30枚10円で売るみたいに、収入が厳しくても手に入る、ちょびつとでもぱっと出せる。その人の尊厳とか、さっき話に出たような、恥ずかしくてどうしてもこそこそとせざるを得ないのを防止するようなやり方は、何か仕組みでできるのかなど。

○長谷部氏 見られたら、その住宅に住んでいられないからね。絶対に見られたくない姿。

○実吉氏 特に年配の方は、長年生きてきてプライドがあって、当然ですから。

今のは思いつきですけども。つなぐということで、一つは、当事者。一番しんどい人ほど自分から声が出せないことが多いですね。そういう方が、支援者や制度とか社会資源にどうつながるのか。

このつなぐというのは、もちろん一番大事なテーマで、実は僕は、夕べはほとんど寝ずに東京の4回のフォーラムを聞いたのですけれども、やはりその工夫とか、民間だからこそというのがたくさん出ていたと思うのです。なので、いかにその民間の活動、地域活動が盛んなところはそこが頑張ったら良いし、NPO的なところが盛んなところはそこが頑張ったら良いし、まさにいろいろとあってよくて、それをどう引き出すか。

私がさっきつなぐということで言ったのは、支援者同士がつながってもっと発展していったり、あるいは支援者とその地域の団体を支える寄附者や市民とかが参加するボランティアがもっとつながる可能性がたくさんある。

さっき長谷部さんが誘われたからとありました。これは寄附でも全く同じで、寄附しない理由のトップは、「だって頼まれてないもの」ということが多いのです。でも、一方で寄附が欲しい活動は山ほどあって、そこの市民との出会いがない。その寄附の文化を高めていくことが、支え合いの寄附をこの町で高めていくことになると思います。

実は、政令市を統計で比べてみると、去年の家計調査で、神戸市は世帯当たりの寄附額

は第2位らしいのです。これはすばらしいことなのですけれども、では、寄附する頻度は20市のうち15位。これがもっと高いと良いですね。

なので、寄附を促進するために、国レベルで制度を変える。例えばふるさと納税は返礼品もあって、ほとんど懐を痛めずに寄附ができる。それに対して、認定NPO法人は、せっかく物すごく苦勞して取っても5割が上限。寄附をする認定NPO法人は、今、神戸市で24あるのですけれども、なかなか増えません。それは、寄附のメリットがふるさと納税に比べると見劣りすることと、いろいろな手間暇がかかる。

ハードルを下げてあげることと、インセンティブ、メリットを高めてあげるといのは、是非制度レベルで考えて良いのではないかと思いますし、自治体の任意のやり方でも、認定NPO法人になったら、市の広報で順々に紹介してあげるとか、市民にアピールする。市民に、すばらしい団体だから、是非寄附されたらどうですかと。するのは市民の自由ですけれども、紹介してあげるのは自治体でもいろいろとできると思うのです。

そういった官民連携したやり方というのは是非進めていただきたいし、それをバックアップする。これから5年、10年かけて神戸を寄附が盛んな町、ボランティアが盛んな町にどんどんしていくような施策を是非お願いできればと思います。

以上です。

○岸田氏 良いですか。

ちょっと違う切り口で、仕事という切り口で少しお話ししたいのですけれども、今、僕らは企業との関わりが増えていて、中小もSDGs、2015年から2030年ということは今意識されるようになって、今まではこういった福祉施設に企業が来るといのは少なかったのですけれども、自分たちも地域のために何かしたいという企業が非常に増えてきていると感じています。

それで今は障害の雇用もそうですけれども、ひきこもりであったり、最近では、児童養護施設、親から育てられなくてという子たちのことなんかもお伝えすると、知らなかっただけで、知ったら是非何かしたい、自分たちのところで雇用も考えられるかもとか、いろいろなことを言うてくださるので、是非そういう企業の方は、これから地域づくりにどんどん巻き込んでいけると良いなと思っています。

垂水商店街も一つで、商店街なんかでもっと地域のことをやっていきたいという企業も多くあるので、そこを巻き込んでいって、それは市からだったり、国からかは分からないのですけれども、その企業に何か地域のためにやっている企業みたいな印ができたりすると、企業も今度は若い人を雇うときに、今、若い高校生とか大学生の子らもそういう企業を探すようになっていっているので、そうすれば、企業にとってもプラスになって、地域にもプラスになるのではないかと日々感じていますというのをお伝えしたかったです。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 長谷部様、お願いします。

○長谷部氏 すいせいさんは、仕事をつくって、仕事と本人をつなぐ、イコール社会とつながりたいなものがすごく上手だなといつも思っているのですけれども、社協の立場でい

くと、実はもう一か所つながってほしいといつも思っていて、先ほど松岡さんがおっしゃった学校でも家でもない場所という話にもつながるかと思うのですが、僕は社協の人間ですので、一人の人間が生きていくためには、3つの居場所が必要だと思っていて、それは家庭の中での居場所や役割と、仕事や学校という場所での居場所や役割、もう一つが、地域の中での居場所や役割と3つ必要だと思っています。

実吉さんが冒頭の話の中で、芸術やスポーツみたいなジャンルもという話もされましたけれども、そういうところも含めて、家でも職場でもない、家でも学校でもないもう一つの居場所も必要で、それはスポーツでも何でも良いと思っていて、3つの場所で自分の居場所や役割があると、家庭で何かうまくいかないときとか、職場でうまくいかないときに、自分の生活が家庭しかない、本当に全部が駄目な感じになっていくし、仕事ばかりやっていて、家庭のことは何もしていないとか、何の役割も持っていない人が職場でつまずくと、本当に人生全部が駄目になったような落ち込み方をする。それでも家でつまずく、会社でつまずく、学校でつまずくというのはやはりあるので、そういうときは、3つあると、1か所つまずいても、どこかで自分を支えていける社会をつくるべきです。

私は社協の先輩に、イギリスでは、紳士と認められるためには、家庭と地域と職場の3つに役割と居場所を持っていないと、イギリスでは紳士としては認められないのだと教わったことがあって、そういった立場を3つ意識できるような社会にしていかなければいけないと思っていて、今、兵庫社協では、中学生を対象に、この3つの居場所をつくるための特別授業みたいなものをやらせていただいています。地域で活動していらっしゃる松岡さんとか福永さんみたいな方に来ていただいて、中学生と話をするのは。そうすると、これで給料をもらっていると。特に福永さんは地域のことをやっている方なのに、これが仕事だと中学生たちは思っているのです。いや、生活のためにお金をもらうというのは別にやって、地域のためにやっているという人が世の中にはいっぱいいるのだということを教えています。

私としては、中学生が卒業するときとか小学生が卒業するとき、将来の夢が仕事の話ばかりではなくて、将来は自治会長になりたいとか、民生委員になりたいという子が出るぐらい、地域の中での役割という将来像も教えていくことが必要だと思っていて、そうすると、3つの居場所があると、孤独・孤立に強い個々人が生まれていくのではないかと思っています。無理やり絡めました。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 長谷部様のコメントに、最後に誰か。

では、福永様、お願いいたします。

○福永氏 地域に第三の場所があるというのは、確かに本当にそうだと思います。

子供の居場所づくりも、子供にとって学校でもない、家庭でもない、子供なりに何か悩みがあったり、ストレスを発散してみたかったり、そんな場所はとても重要だと思うのです。ですから、これからもわんぱくクラブを続けていきますけれども、子供の第三の場所になるように努力していきたいと思っています。

私自身も、第三の場所があるから、年がいても安泰なのです。多分、私は孤立も、孤独も死ぬまで全然ないと思うので、地域の活動をさせてもらうというのは、私自身にとっても本当にありがたいなと。本当に常にこの地域をよくするにはどうしたら良いのかということも考えるのです。

ですから、神戸市が分譲してつくっているのは良いけれども、高齢化して、これからがまたまちづくりでどうしたら良いかとみんなで考えるところだと思うので、私自身も、これからも頑張って勉強していきたいと思います。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 それでは、ありがとうございました。

神戸会場での意見交換の最後に、久元神戸市長、お願いいたしたいと思います。

○久元神戸市長 今日は非常に良い御意見をいただいたので、中途半端に総括する必要もない。

ただ、最後に出た3番目の場所という話をしますと、かなり多くのシニア世代、特に50代以上の男にとってみたら、3番目の場所は居酒屋なのです。昭和レトロのスナックとかは、コロナで行けなくなっているわけです。

あと、鳥取ではお寺の役割が結構あると岸田さんがおっしゃった。お寺とか神社、あるいはキリスト教の教会でも、ほかの教会でも良いのですけれども、そういう場所は、人と人とのつながりを結構つくってきたし、地域社会の中でもそういう人とのつながりを生んできたという面があった。

こういう話を役所ですると、憲法がとか、政教分離に反するとか必ず言うのですけれども、人間は一人では生きていられないし、やはり誰かとつながってほしいという潜在的な欲求があるわけですから、そういう先入観を捨てて、それを阻害している要因を取り除き、一緒に集まれるような場所を全市一律とか、全部役所がやりますとか、全部民間にお願いしますというような固定化した考え方ではなくて、いろいろなアプローチで一緒に集えるような場所、誰かと話ができるような機会をどうつくっていったら良いのかということが大事で、今日は、非常に良いヒントをいただいたという気がいたしました。

以上です。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 ありがとうございました。

予定されておりました15時までもう間もなくとなりましたので、最後に、坂本大臣から御発言をいただきたいと思います。

その前に、東京側におきまして、カメラとプレスが入りますので、しばらくお待ちください。また、神戸側でもプレスが入りますので、しばらくお待ちください。

(報道関係者入室(神戸会場、東京側))

○谷内孤独・孤立対策担当室長 それでは、坂本大臣、お願いいたします。

○坂本孤独・孤立対策担当大臣 今日は、本当に様々な御意見を聞かせていただきました。

ありがとうございました。

これまで、東京のほうでは4回のフォーラムを実施いたしました。どちらかといえば全国的に活動をされているNPOの支援団体の皆様方の御意見を聞いて、それはそれで非常に参考になったわけですが、今日、皆さん方の御意見を聞いて、本当にそれぞれの地域で、あるいはそれぞれの分野でより具体的な問題に真正面から向かい合っていってほしいのだなということを改めて感じました。この地方フォーラムの意義、大切さといったものを感じたところです。

特に、皆さん方の意見を聞きながら、ごみ屋敷にしても、あるいはお母さんのストレスにしても、ちょっとしたことを見逃さない。それから、いろいろと重ねていく中で、無理はしないで、いろいろなことを積み重ねていく。それから、いろいろなものを辛抱強く、あるいは一生懸命に継続していくことはやはり大切だなと思いましたし、集まる場所とか、気楽に皆さんたちが行って会話をできる場所といったものも大切だと思いました。それから、人に喜んでもらう、そのために褒める、あるいは私たちのほうからも、悩んでいらっしゃる方々にいろいろとやりがいがあるようなことをしっかりとサジェスチョンするといったことも大事だなと。そういったいろいろな具体的なお話を聞かせていただきました。心から感謝申し上げたいと思います。

そういうものを総称して、私たちはいかにタッチポイントをつくるのか。皆さんたちの話を聞いていながら、それだけ今の都会においても、全国的においても、あるいはコロナ禍においても、やはり孤独・孤立問題は深刻なのだと、より根が深いのだなということを改めて感じたところでございます。

そういったタッチポイントをいかにつくるかということは、神戸市でつなぐ課というのをつくっていらっしゃるけれども、この行政間のつながり、あるいは行政と企業をつながり、あるいはNPO団体を始めとする各社協も社福も含めて、そういった方との現場とのつながり。私たちとしては、こういったつながりをどういう形でつくっていくのかということも、現場の皆さんたちの日常の、そして地域の意見を聞きながら、改めて真に迫った形で私どもも十分に感じたところでございます。

今後、これから更に孤独・孤立の問題を様々な形で政策にしていきたいと思います。その政策の中で、今日皆さん方から出た様々な御意見といったものを取り入れるところはしっかりと取り入れていかなければいけないと思っております。

それから、年末に向けて税制調査会もありますけれども、寄附がしやすいような税制といったことについても御意見が出ました。いろいろな法人があつて、いろいろな団体があつて、一概にこれをどのように損金算入にするとか、なかなか難しいところもありますけれども、これからの課題として、しっかりと受け止めてまいりたいと思います。

それから、今日のような形でNPOの皆さん方、更には社会福祉協議会の皆さん方、社会福祉法人の皆さん方、そして、それぞれ現場で活動していらっしゃる皆さん方で意見を出し合う場、団体の横の連携というものを今後も取っていかなければいけないし、国としても、

今後、そういうものを取っていかなければいけないと思っております。

私たちが、行政として何ができるのか。一番日常の生活で苦しんでいらっしゃる方々に、どのような形で支援の手を差し伸べることができるか。その間には必ず各団体の皆さん方がいらっしゃいますので、この団体の皆さん方と今後、どのように意見交換をしていくのか。団体の皆さん方同士の様々な情報交換もしていけるのか。そして、現場で非常に末端でと言いますか、生活の中で厳しい状況にいらっしゃる方々あるいは悩んでいらっしゃる方々とどのようにつながっていくのか。そういった仕組みというものをしっかりと考えながらこれからやっていきたいと思っております。

今日は、本当に貴重な御意見ばかりでございました。今後も、まだまだこのフォーラムを続けていくつもりでございますので、これからもいろいろな御意見を私たちにくださればと思っております。

今後、孤独・孤立対策を進めていくに当たりまして、今日は短い時間でございましたけれども、皆さん方の貴重なチャンスを私たちにも与えていただいた。そのことを感謝しながら、私からの締め御挨拶にさせていただきたいと思っております。ありがとうございます。

○谷内孤独・孤立対策担当室長 大臣、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、本日のフォーラムを終了させていただきたいと思っております。

皆様、本日はどうもありがとうございました。